

戦後六〇年に思う

— 八木三男『楷と臘梅』に寄せて —

牧 枉 名

八木三男さんは二十数年来の友人である。このころは少なくなつた文人のひとりだといつてよい。暮敵として親しみを覚えることはもちろんだが、それにもまして、博學よに驚かされるばかりか、香り高い文章にひかれる。本書も最近折りに触れて書いたものを纏めたものである。難病を抱えながら、彼は机のまえに座つてものを書いていくときに、最も安らぎをおぼえるのではないかとすら思うのである。

私は、教育のことを考えてきたも

のとして、本書をす通りするわけにはいかない。とりわけ、「教育を侮蔑する」、「倒立した死」、「新瀉から日本の教育を考える」という洞察に共感する。「死に体」ともいえるこの国に僅かに光をみる思いがするからである。

人間的知性を侮蔑する

米超大国の大統領は、「自由と人権」・「民主制」の旗を掲げて、イラクに侵攻した。それ以前にも自国以外に軍隊をおくり何十万の人間を殺

したとか。報道によれば、イラク掃蕩兵のうち一四万人が精神障害を負い、二万人がPTSDであるという。私がそれにみるのは、「人間の知性への蔑視、人権・民主制の否定」にほかならない。その国の尻にくつついて、同じ道をあゆみ、憲法・教育基本法の改正を狙っているのが日本にほかならぬ。光どころか闇をみる思いである。人間的知性への侮蔑がなにをもちたらしめたかを、私たちは知っている。

八木は「精神文化の自主性を否定することは、すべてのナシヨナリズムの本質のなかに潜んでいる」というクルテイウスの言葉を引き、ナシヨナリズムと専制支配は「精神文化の自主性」を極端に嫌う、精神的自主性もつとも支配しにくいからである、という。支配者は一方で9・11をテロとよび、他方で日の丸・君が

代の強制はテロールではないという。抑圧政治・恐怖政治はテロールではなかったのか。八木のいうとおりである。

倒立した死

計測可能性と管理可能性を徹底的に追求するのが現代社会だといわれる。そういえば、近代科学そのものは、あえていえば、人間とその社会を細かく分解・解析すること力をついできた。私も読んだが、フィリップ・アリエスの『死を前にした人間』に触発されて、八木は、現代では死にゆく者は死の主体ではなくなった、一九世紀には「汝の死」であつたものが、「死は管理され隠蔽され」「事務的に手際よく処理されていく」とのべる。科学・医療技術の「進歩」が二人称の死を三人称の死へと移行させたのだ。様々な試みがされ

てはいるが、人間と人間が包まれている世界をトータルにとらえるには、私たちは何をすべきなのか、疑うべき概念、否定すべき対象があまりにも多く、私たちはそれらに囚われている感が深い。

地域から日本を考える

「新潟から日本の教育を考える」は、にいがた県民教育研究所の根幹をなす精神である。八木三男所長から幾度となくこの言葉をきいた。機関誌(季刊)『教育情報』にも「新潟県の子育て百科」にもこの精神が滲みでている。そういえば、ある研究所の연구원として上原専祿のゼミに出ていた頃(五〇年近く昔のこと)、上原は「地域から日本・世界を串刺しにしてみる」としばしばのべられていた。そして、イギリスの社会人類学も、ドイツの東方学も、フランス

の東洋学も対象となつた地域内在的なものではない、と批判されたことを思い出す。また、つまらぬことだが、大学の教員だつた頃、ゼミの時に、新潟出身の学生が雪國のことをしりもしないでゴチャゴチャいな!と論争になつたことも思い起こされる。それほど、地域の内側から日本をみるのは重要なことだと今更ながら思い知らされる。

戦後六〇年にして思ふ

私は、日本の戦後の基点に欠陥があつたと考えている。戦中を生きてきた大人たちも、私たち「少国民」も真面目に「聖戦」に力をつくした。しかし、真面目なだけでは駄目なのである。閉じ込められた囲いの中で真面目であつても、より広い世界が見えるわけではないし、自分の内側に真の自己が形成されているとはい

えない。

私という欠陥のひとつは、私たちが日本人は、甚だ非主体的に敗戦を迎えたということである。そもそも天皇の命により戦争がはじまり、天皇の詔書によって戦争が終結したのだから、国民が主体的でありうる筈はなかつたのだ、と行ってしまえばそれまでである。しかし、国民一人ひとりもまた戦争に関わり、人を殺したり、自ら命を落したり、家族・財産をうしなつたわけだ。戦争をはじめさせない、あるいは、もつとはやく終結させることに何の関係もなかつたとはいえないと思うのである。ここでいいたいのは、日本を支配していた者たちのことではない。庶民の敗戦のうけとめかたを丁寧に検討しなくてはならないということである。

第二は、無責任性ということであ

る。大日本帝国憲法の下では、天皇は国家元首であり、宗教・教育・外交・軍事・内政等すべてについて権力を掌握していた。天皇大権と国民（臣民）の無権利の体系として旧秩序は作られていた。総理大臣・各大臣には天皇を輔弼する責任はあつたが、国民に責任を負う制度ではなかつた。敗戦の責任をとつて自決した軍人も部下に申し訳ないという思いはあつたにせよ、基本的には、天皇陛下にたいして責任をとつて自死したのであろう。

第三は、他者への共感性の欠如、他者と共存する意識の希薄性である。今はグローバル化とか国際化とかいわれるが、こうした言葉が、私には空しく響く。民族の違い、男性と女性、障害の有無、富者と貧者、大人と子ども、数えあげればきりが無いほど、人間としての差異が社会的差

別に結びついているのがこの社会に他ならない。なぜ日本人は中国人や韓国人を差別し、ハンデキャップをもつ人への共感を自ら投げ捨ててこままできてしまったのであろう。

六〇年によせてその基点について私見をのべたが、反省どころか事態はますます悪化していると思う。根が深い歴史的問題だが、まずは国家が国民教育の教師となつて進めてきた日本の明治二十年代以降の教育を厳しく洞察せねばならぬと心底思うのである。

* * *

八木さんが教師から自由が剥奪されつつあることを憂えていることに触れず、勝手な「おもい」のみを書いてしまった。お許しいただきたい。世の喧騒・汚濁から少し離れて、静かに語り、暮も打ちましよう。

(まき まさな・元東京大学教授)